
研究ノート

フィールドワークを活かした初等社会科授業の開発**安藤 哲郎**

滋賀大学教育学部

**Development of Lessons for Elementary School Social Studies
in the Department of School Education and Utilization of Fieldwork****Tetsuro Ando**

Faculty of Education, Shiga University

The purpose of this paper is to organize the background and contents of lesson improvement, focusing on fieldwork in elementary school social studies lessons in the Department of School Education. The main subject of this paper is the combination of initiatives by all students majoring in social studies and an implementation system related to multiple classes.

In the new Course of Study (revised in 2017), it is said that the skills of research activities will be acquired in the third and fourth grades and will be utilized in the fifth and sixth grades. In this way, fieldwork is positioned as a basic skill in social studies. Fieldwork generally has a strong relationship with geography. However, fieldwork is needed not only in geography but also in history and civics. Therefore, in the Department of School Education, it is necessary that not only students of the geography laboratory but also all students of social studies as a whole are involved in fieldwork.

All social studies students had already attended an excursion. However, they did not plan, prepare, or conduct the excursion. These actions are the main pillar of this class's improvement. For that reason, we have established a system for conducting classes in multiple classes across different grades. Specifically, the students perform an advance visit to the excursion site in the second spring semester class, conduct the actual excursion in the second autumn semester, and decide the candidate site for the next year's excursion in the third, full-year class.

As a result, it is considered that the performance was almost successful. However, there are still some issues, so we would like to continue to improve the system.

Keywords: Fieldwork, Excursion, Advance visit to excursion site, Local explanation, Elementary school social studies, the Department of School Education

1. はじめに

本報告は、教職課程における小学校社会科の内容に関わ

る授業において、フィールドワークを活用した形で行った
授業改良の構想の背景と内容について、これまでと今後の

課題点も指摘しながら整理することを目的としている。

本報告の内容は、共同でフィールドワークの授業を担当する松田隆典教授と一緒に構想したものが多く、さらに、以前に松田教授がまとめられた報告¹⁾によるところも大きく、本報告はその続きの内容に位置づけられる。

教員養成課程におけるフィールドワークの授業に関しては様々な報告が得られている。例えば、外池が秋田大学教育文化学部社会科教育研究室において、2年次に行った身近な地域へのフィールドワークを3年次に小・中学校それぞれの授業構築に結びつける、という取り組みを報告している²⁾。

他に磯野・宮岡が、三重大学教育学部での課題と取り組みとして、地理学専攻以外の学生を考慮した結果としてフィールドワークの方法論を学ぶ機会が少なくなっている状況を踏まえて、負担増覚悟で実習科目を復活させたこと、地理以外の社会科学者がフィールドワークにほとんど参加できていない状況を課題として指摘し、講義科目に1コマの日帰り野外巡検を組み入れたこと、を上げている³⁾。また、河本が奈良教育大学の社会科教育専修の授業で「ならまち」を歩いてウィキペディアの記事を作成させるという演習を報告している⁴⁾。このような社会科全体の学生を対象とした取り組みについては上記の松田報告でも指摘され、磯野・宮岡報告や河本報告以前から実践されている点でもあり(後述)、本報告でも取り組みを行った。

これらの先行事例と比較した本報告の特徴としては、「地理研究室にとどまらない受講生に、主体的に取り組んでもらう試みを、複数の授業を直接的に連関させて行っている」という点であろう。それぞれに多くの事例が得られている取り組みを組み合わせに行っているという点に特徴がある。この点を中心に整理することにしたい。

尚、本報告で特に中心とするフィールドワークは、「エクスカッション」と呼ばれる地域見学会である。以前は「巡検」と称されることが多かったが、最近では学会などでもエクスカッションと呼ばれる機会が増えてきている。多くは日帰りで行われ、現地で案内者の説明を聞きながら、地図や資料を片手に地域を歩き、その地域の特色を捉えるという、フィールドワークの1つである。

2. 小学校社会科学習指導要領におけるフィールドワーク

(1) 学習指導要領本文にみるフィールドワークの位置づけ

まず、最新の小学校学習指導要領でフィールドワークが

どう位置づけられているかを整理しておく。小学校の学習指導要領で関係している部分について、表1に示した。

表1によると、第3・4学年では目標と内容にフィールドワークと関連する部分があり、第3学年では内容の全ての項目に関係している一方、第5・6学年では一部の内容にのみ関係した記述がなされている。第3学年においては目標と内容とがフィールドワーク(ここでは「調査活動」とリンクしており、第4学年でも概ねつながっているが、第5・6学年では内容の一部にとどまっている。

この点について、「小学校学習指導要領解説」(以下、「解説」)の技能に関する目標で、「第3学年及び第4学年において身に付ける観察や見学、聞き取りなどの調査活動の技能については、第5学年及び第6学年においても必要に応じて取り上げて身に付けるように指導することが大切」⁵⁾とあるように、第3・4学年で身に付けさせ、第5・6年でも活用する、という扱いであり、社会科の基本的な技能としてフィールドワークが位置づけられていると言える。

ところで「解説」では、「①地理的環境と人々の生活」「②歴史と人々の生活」「③現代社会の仕組みや働きと人々の生活」のそれぞれの区分が示されている(表1に示した)。これによるとフィールドワークが関係する内容は、第3学年では全分野に区分されているが、第4学年では②と③、第5・6学年では③に区分されているものに含まれている。

この区分に関しては「主として」とあり、澤井はこの文言が入っている理由について「小学校社会の内容は、明確に「地理」「歴史」「公民」に分けることが難しく、それらが相互に結びついた総合的な内容として構成されているからである」⁶⁾と指摘している。

フィールドワークは上記の3分野では「地理」との関係が深い印象が強いが、小学校社会科のフィールドワーク関係の内容では、一見、地理的内容との関わりが薄く感じられる。しかし、区分の難しさからすれば、地理との関係の強いフィールドワークがあらゆる分野で必要とされている、と解釈することも可能であり、その方向性で考えれば、教員養成課程において、地理研究室だけでなく社会科全体の学生にフィールドワークと関わってもらうことは、不可欠であるということになるだろう。本報告の取り組みは、この点でも必要なものと位置づけられる。

(2) 小学校学習指導要領解説における指摘

もう1点、全学年にわたる「指導計画の作成と内容の取扱い」のうち「内容の取扱いについての配慮事項」として、

2点の記載があった。まず「観察や見学、聞き取りなどの調査活動を含む具体的な体験を伴う学習やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること」という点について、「解説」の説明に、まず「事前・事後や現地における指導の充実を図り」⁷⁾とあり、フィールドワークの実施当日だけでなく事前・事後の指導も充実させることが必要であることが指摘されており、それができる指導者を育成するために、教

員養成課程でも当日参加にとどまらないことが期待される。

さらに、「博物館や資料館などの施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などについての調査活動を取り入れるようにすること」という部分に関連して、同じく「解説」には以下の記載がある。

表1 小学校学習指導要領（社会科、平成29年告示）におけるフィールドワークの位置づけ

| 学年 | 項目 | 掲載 | 本文の関係部分 | 関連する表現 | 区分 |
|----|----------------|-----------------|--|----------------------------|----|
| 3 | 目標 | (1) | 身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。 | 調査活動 | — |
| 3 | 内容 | (1) ア (イ) | 身近な地域や市区町村の様子…観察・調査したり地図などの資料で調べたりして、白地図などにまとめること。 | 観察・調査 | ① |
| 3 | 内容 | (2) ア (ウ) | 地域に見られる生産や販売の仕事…見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、白地図などにまとめること。 | 見学・調査 | ③ |
| 3 | 内容 | (3) ア (イ) | 地域の安全を守る働き…見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、まとめること。 | 見学・調査 | ③ |
| 3 | 内容 | (4) ア (イ) | 市の様子の移り変わり…聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめること。 | 聞き取り調査 | ② |
| 4 | 目標 | (1) | 自分たちの都道府県の地理的環境の特色、地域の人々の健康と生活環境を支える働きや自然災害から地域の安全を守るための諸活動、地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働きなどについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。 | 調査活動 | — |
| 4 | 内容 | (2) ア (ウ) | 人々の健康や生活環境を支える事業…見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、まとめること。 | 見学・調査 | ③ |
| 4 | 内容 | (3) ア (イ) | 自然災害から人々を守る活動…聞き取り調査をしたり地図や年表などの資料で調べたりして、まとめること。 | 聞き取り調査 | ③ |
| 4 | 内容 | (4) ア (ウ) | 県内の伝統や文化、先人の働き…見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめること。 | 見学・調査 | ② |
| 5 | 内容 | (4) ア (ウ) | 我が国の産業と情報との関わり…聞き取り調査をしたり映像や新聞などの各種資料で調べたりして、まとめること。 | 聞き取り調査 | ③ |
| 6 | 内容 | (1) ア (ウ) | 我が国の政治の働き…見学・調査したり各種の資料で調べたりして、まとめること。 | 見学・調査 | ③ |
| 全体 | 指導計画の作成と内容の取扱い | 2 (1) | 各学校においては、地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、観察や見学、聞き取りなどの調査活動を含む具体的な体験を伴う学習やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること。（以下略） | 観察や見学、聞き取りなどの調査活動を含む具体的な体験 | — |
| 全体 | 指導計画の作成と内容の取扱い | 2 (2) | 博物館や資料館などの施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などについての調査活動を取り入れるようにすること。また、内容に関わる専門家や関係者、関係の諸機関との連携を図るようにすること。 | 施設の活用 調査活動 | — |

「区分」は、「小学校学習指導要領解説」に記載されている「内容」の区分を表し、「①地理的環境と人々の生活」「②歴史と人々の生活」「③現代社会の仕組みや働きと人々の生活」のそれぞれの番号。

また、身近な地域や国土には、様々な遺跡や文化財が保存、管理されており、それらを観察したり調査したりする活動の場を、学習のねらいを考慮して、指導計画に位置付けることも考えられる。例えば、第3学年での市や人々の生活の移り変わりに関する学習や第4学年での県内の特色ある地域の人々の生活に関する学習、第6学年での我が国の歴史学習などでは、身近な地域や国土に残されている様々な遺跡や文化財、歴史博物館などを直接訪ねて観察・見学したり調査したりする活動を組み入れることができる。このことにより、児童は一層具体的に学習できるようになり、学習のねらいを効果的に実現するとともに、歴史に対する興味・関心を高めることができる⁸⁾。

上記の点には、前項で取り上げた内容が反映されていると考えられる。すなわち、第3・4学年で身に付けたフィールドワークの技能を高学年でも活かすという点と、フィールドワークが分野相互に結びついている点である。「歴史と人々の生活」の内容でフィールドワークを行う必要のあることが例を挙げて明確にされており、教員養成課程の授業でも、歴史的な内容をフィールドワークの中で取り上げる必要があると考えられる。この点については、後述する内容と関係するので、その際に再び触れたい。

3. これまでの課題を含む構想の背景と対象科目

(1) フィールドワークを含む授業とその対象者を巡る議論

本章では、滋賀大学教育学部でのフィールドワーク関連科目の取り組みについて、これまでの状況から述べていく。

フィールドワークを卒業研究やその準備段階で実施することは、地理学研究室において伝統的に重視されてきており、過去の卒業生も含め積極的に取り組んできている。

ただし、その教育の主な対象は研究室のゼミ生に限られてきた。この背景については、既に松田報告で「できるだけ多くの学生、少なくとも社会科の学生に拡大させたらどうか」という意見はあるだろうが、観察実習に比べて本実習のマネジメントの困難を考えると、組織的な体制が必要となる⁹⁾と言及されたように、全員に説明をさせる方式の確立が困難であるという点が大きく、30人近くになる社会科の学生に範囲を広げることは、難しい側面がある。以前に社会科の学生全員に現地説明をさせる方法を探られたことがあったが、その成果に対する評価ができない点と経験を活かすことが難しい点を指摘されている¹⁰⁾。

しかし、後述するように社会科全員にエクスカージョンへ参加してもらうように工夫され、筆者も2014年度の着任以降、授業に関わってきている。

(2) 対象とする科目

対象とする科目のうち、中心となる科目は「地域基礎学」(秋学期・月曜3限、2回生配当)であり、松田教授と筆者が共同で担当している。当該科目は、初等社会専修(小学校社会科)の必修科目として位置付けられていると同時に、中学校社会科・高校地理歴史科の免許科目である¹¹⁾。2018年度までは小学校社会科で扱われる様々なコンテンツを取り上げる方式で授業を行っていたが¹²⁾、2019年度はフィールドワーク関連科目として位置付けることとした。

上記の「地域基礎学」のほかに、「初等社会科内容学」「社会科授業研究」「比較地域論」の各科目の内容にフィールドワークの機会が(科目間の連動も含めて)あり、これらについても併せて取り上げることにする。

(3) 2018年度までのフィールドワーク関連科目の概要

2018年度におけるフィールドワーク関係科目について、その内容を表2に整理した。いくつかの変更を経て、この形に落ち着いていた。

まず1回生のほぼ全員が受講する「初等社会科内容学」において、出身地の市町村ガイドマップ作成を課題として取り組んでもらっている。これは松田教授担当の2017年度までの方法を踏襲している。ガイドマップの作成の際、遠景と近景の写真撮影を課しており、フィールドワークを必要としている¹³⁾。受講生は、大型連休等を利用して出身市町村でのフィールドワークを行っている¹⁴⁾。

次の段階として、社会専修・専攻に所属した学生にフィールドワークを経験してもらう。社会科全員にフィールドワークに取り組む形にするためには、ほぼ全員が登録する科目を用いる必要があり、社会科2回生全員に受講を促している「社会科授業研究」を活用している。原則として春学期に2回開催するエクスカージョンに参加し、道中で写真を撮影したり、聞いた説明をメモしたりしながら歩き、後日、観察した内容や目的地について調べたことなどを、10数枚の撮影写真とともにレポートにまとめて提出する。

表2 滋賀大学教育学部におけるフィールドワーク関係科目の内容（2018年度）

| 科目名 | 対象と学期 | 受講者 | 主な内容（地理関係） | フィールドワークの内容 |
|----------|-------|------------------------|-----------------------|-------------|
| 初等社会科内容学 | 1 回生春 | 学年のほぼ全員 | 出身地の市町村 ガイドマップの作成 | 出身地での写真撮影 |
| 社会科授業研究 | 2 回生春 | 社会科の中等専攻・ 初等専修の学生全員 | エクスカージョンへの参加 | 写真撮影と観察報告 |
| 比較地域論Ⅱ | 2 回生秋 | ゼミ学生中心 | エクスカージョンの企画・ 下見・準備 | 下見（町歩き） |
| 地域調査実習Ⅱ | 3 回生春 | ゼミ学生のみ | エクスカージョンの準備・ 実施 | エクスカージョン実施 |

ゼミ演習の科目を除く。「初等社会科内容学」「社会科授業研究」は他分野との共通科目で、前者は5回、後者は1回分を担当。

そして、上記のエクスカージョンで説明を行うのは、「地域調査実習Ⅱ」の受講生（実質的に地理学研究室に所属する3回生）である。2回のエクスカージョンの企画し、案内する内容を考え、当日の引率をしてもらっていた。

ただ、この3回生科目の短い期間での準備だけで企画・案内を行うことは難しい。そこで、実質的にゼミ生中心の科目である2回生秋学期の「比較地域論」において、候補となる地域の地形図を読図したり、下見を行ったり、説明を行う場所について調べたりまとめたりすることを行った。この成果を生かして、翌年度にエクスカージョンを担当するという流れである。

この方式は一定の効果があつたと考えられる。案内を担当した地理研究の学生が、エクスカージョンを活用した卒業論文をまとめるという例がいくつか見られるようになった点や、社会科の学生全体にエクスカージョンを知ってもらいフィールドでの学びを体験してもらった点では成果があつたと思われる。しかしながら、社会科全体での取り組みという面では、もう少し進化したいという考えもあり、2019年度の新しい構想へとつながることとなる。

(4) 構想に至る経緯

構想のきっかけは日程確保の問題であつた。基本的に授業のない、教授会未開催の木曜午後か土日を活用していたが、「社会科授業研究」で2回の実施日を確保するのは、教員・学生ともに予定を勘案しなければならず、元々毎年、綱渡りのような実施体制であつた。土曜祝日の授業が多いこと、部活動や教育体験などで学生が忙しいこと、また説明者の3回生が6月に教育実習に行くことから、準備期間を考慮すると5月と7月の開催の機会が多かつたが、7月には補講日も設定されており日程の確保が厳しかった。

そんな折、2018年度2回目のエクスカージョンを気象警報（大雨）の発令により秋学期に延期せざるを得なかつ

たこともあり¹⁵⁾、春学期開講科目である「地域調査実習Ⅱ」の受講生に秋学期に案内させるイレギュラーな形となつたが、大雨災害も多くなってきている中、当日の気象状況に対しての配慮がこれまで以上に求められるようになってきた。そのため、抜本的な見直しが必要な状況となつていた。

そこでまず、それまでのエクスカージョン企画の際に下見をしてもらっていたことを念頭に、「社会科授業研究」の受講生に、個人単位で歩いてもらうことを思い付いた。その流れから、これを「下見」として位置づけ、どこかで「社会科授業研究」の受講生に案内をしてもらえないか、という考え方が浮上した。「比較地域論」はゼミ生中心の少人数であるため、「社会科授業研究」の受講生の一部にとどまる。いくつかの科目の中で、最も多くの学生が受講する可能性があつた科目が「地域基礎学」であつた。

「地域基礎学」は先述のように初等社会専修の必修科目であると同時に、中学校社会科・高校地理歴史科の免許科目であり、少なくとも2回生全体の3分の2の受講生は期待できる¹⁶⁾。ゆえに「社会科授業研究」での課題を「下見」とし、「地域基礎学」での「案内」へつなげてもらう仕組みを、社会科の多くの学生に経験してもらえることになる。

さらに都合がよかつたのは、「地域基礎学」が秋学期開講科目という点である。「社会科授業研究」の下見を春学期中に課してレポートを提出してもらい、それを受けて「地域基礎学」でプランを練り、役割を分担して案内をもらえれば、流れとしてもよいため、早速2019年度から実施することにした。これに伴い、授業計画や科目の整理を全体的に行つたが、それについては次章で述べる。

4. 講義での具体的な取り組み

2019年度におけるフィールドワーク関係科目の内容を表3に整理した。「社会科授業研究」「地域基礎学」「比較地域論」について順に、具体的な取り組みを取り上げる。

(1) 「社会科授業研究」での取り組み

社会科2回生全員が受講する「社会科授業研究」では、これまでは先述の通り、エクスカーションへの参加と課題の実施で構成していたが、2019年度は、受講生が1人ひとりでエクスカーションを行う形態に変更した。受講生は5、6月に各自で時間を見つけて対象地域を歩く「下見」を実施してもらい、その際に撮影した写真と、撮影地点や

歩いたコースを示した地図を添えてレポートをまとめてもらう課題を出した。具体的には、「交通」「土地利用」「産業」「地形」の各項目に関係する2か所以上の写真と「その他」1か所以上の写真で合計10地点以上を撮影した10枚以上の写真を添付し、それらの写真や地図を活用しながら旅行記（5000字以上）を執筆することを求めた。

表3 滋賀大学教育学部におけるフィールドワーク関係科目の内容（2019年度）

| 科目名 | 対象と時期 | 受講者 | 主な内容（地理関係） | フィールドワークの内容 |
|----------|-------|------------------------|-----------------------|-------------|
| 初等社会科内容学 | 1回生春 | 学年のほぼ全員 | 出身地の市町村 ガイドマップの作成 | 出身地での写真撮影 |
| 社会科授業研究 | 2回生春 | 社会科の中等専攻・ 初等専修の学生全員 | エクスカーションの下見 | 写真撮影と観察報告 |
| 地域基礎学 | 2回生秋 | 社会科初等専修全員 と中等専攻の一部 | エクスカーションの企画・ 準備・実施 | エクスカーション実施 |
| 比較地域論 I | 3回生通年 | ゼミ学生中心 | エクスカーション対象地域 設定・下見 | 下見（2回実施） |

ゼミ演習の科目を除く。「初等社会科内容学」「社会科授業研究」は他分野との共通科目で、前者は5回担当。

「社会科授業研究」の対象地域の地形図読図については、松田教授が担当されている「地理学概説Ⅱ」の中で行われている。4月に受講生に対して地形図を配布したのと同時に読図と解説、レポートの指示が行われた。

尚、2019年度は「膳所城下町」を目的地とした。受講生は、この地域を含む2万5千分1地形図「瀬田」（平成28年調製）を持参して下見を行い、レポートをまとめた。先述したように歴史的な内容を取り上げる必要のあることが「解説」で触れられており、目的地としてふさわしいと考えられる。

(2) 「地域基礎学」での取り組み

2019年度の「地域基礎学」の授業内容を表4に整理した。一部、「農産物の都道府県ランキング調査」「滋賀県のスーパーの立地」のようにフィールドワークを行わずに課題を準備できる授業回もあるが、これらも写真や地図の活用だけでなく足を運んで観察したことがあれば、より理解しやすくなる素材であり、全体の軸をフィールドワークとして掲げても、大きな問題はないものと思われる。

さて、フィールドワークを伴う授業内容を大きな項目にまとめると、実施順に、①大学周辺の土地利用調査（5回+調査）、②エクスカーションの企画・準備・実施（6回+エクスカーション）、③スーパーの生鮮食品の産地調査（1回+調査）の3つとなる。以下に詳細を述べる。

i) 大学周辺の土地利用調査

松田教授も以前に言及されているが、地理研究室で1976年から行われ続けてきた大学周辺の土地利用調査が、2005年度から社会科全体を対象を広げて実施されていたが、2019年度はフィールドワーク関連という形で「地域基礎学」に組み入れることにした。

大学周辺の土地利用調査は、大学周辺の地域を班ごとに担当範囲を決め、都市計画図（3000分1）を持参して歩きながら、住宅・商店・農地・公共施設などの具体的な土地利用がどのようになっているのかを一軒一軒調べていくものである。人数が多いので2班に分けて同じ地域の調査に取り組んでもらうことにしたが、班内で4グループに分けて分担して実施してもらった。最終的には、調べてきた結果を都市計画図に自分たちで決めた凡例に従って色塗りし、完成図を分析した内容をレポートにまとめてもらった。

ただし、詳細な土地利用を調査すること自体は中学校社会科の内容に関わるものであり、小学校社会科の内容を行う授業に組み込むことは、そのままでは難しい。もっとも、先述の通り中学校社会科の免許科目であるため、それを理由にすること自体は可能ではあるが、それでは授業目的とは合わなくなる。そこで、小学校と中学校でこの内容をどのように連携すればよいのか、という点について指導要領を読みながら考えてもらうこととした。

表4 「地域基礎学」の授業内容（2019年度）

| 授業回 | 授業内容 | 学習指導要領との関係 |
|-------|--|---|
| 1 | 地域観察（土地利用調査）の方法（班分け、担当箇所決め） | 3年2内容(1)「身近な地域の様子」を「大まかに理解すること」に関わる。 |
| (休講扱) | 地域観察（土地利用調査）の実施 | |
| 2 | 土地利用調査の地図化作業（白地図への色塗り） | |
| 3 | 完成図の報告 | |
| 4 | 小・中学校社会科授業への地域観察の成果の活用（概念図と主題図） | 全学年・第3指導計画の作成と内容の取扱い 2内容の取扱い(3)の「身近な地域及び国土の遺跡や文化財などについての調査活動」に関わる。 選択地域によっては4年2内容(4)「県内の伝統や文化、先人の働き」や(5)「県内の特色ある地域の様子」にも関わる。 |
| 5 | 下見レポート報告（「比較地域論」学生より）／協働的な地域見学会（エクスカージョン）の方法①（班分け、対象地域の概観） | |
| 6 | 協働的な地域見学会（エクスカージョン）の方法② グループワーク（対象地域の解説、役割・説明箇所分担） | |
| 7 | 協働的な地域見学会（エクスカージョン）の方法③ グループワーク（説明内容の検討、資料作成） | |
| 8① | 協働的な地域見学会（エクスカージョン）の実施・1回目（午前組参加、3時間コース） | |
| 8② | 協働的な地域見学会（エクスカージョン）の実施・2回目（午後組参加、3時間コース） | |
| 課題 | 撮影写真・観察ポイントの整理 | |
| 9 | デジタル素材を用いた地図などの地理的表現の方法（情報処理室活用） | |
| 10 | 小・中学校社会科授業への協働的な地域見学会の活用（エクスカージョン報告会、情報処理室活用） | 5～8回の内容に同じ。 |
| 課題 | 農産物の都道府県ランキングの調査 | 5年「我が国の農業や水産業における食料生産」。 |
| 11 | 農産物の都道府県ランキングの調査報告(1) | |
| 12 | 農産物の都道府県ランキングの調査報告(2) | |
| 課題 | スーパーの生鮮食品の産地調査 | 3年「販売の仕事」、5年「我が国の農業や水産業における食料生産」。 |
| 13 | 食糧輸入に関するアクティブ・ラーニング（スーパーの生鮮食品の産地調査結果と授業での活用） | |
| 14 | エクスカージョンレポートの相互批評会 | 5～8回の内容に同じ。 |
| 15 | 滋賀県のスーパーの立地（地図化と分析） | 3年「販売の仕事」、4年「都道府県の様子」。 |

「学習指導要領」は平成29年告示の小学校学習指導要領（第2節 社会）。

ii) エクスカージョンの企画・準備・実施

「地域基礎学」の大きな柱となる内容である。エクスカージョンを企画し、配布資料の準備や当日の説明などをすべて行ってもらうものである。2章で「事前・事後や現地における指導の充実」について「解説」に指摘があった点を取り上げたが、これらに関わるプログラムとした。

まず前段階として、「社会科授業研究」で下見を行ってまとめたレポートについて、「比較地域論」の学生が行った批評を聞き（後述）、それから準備を行ってもらった。

それに引き続いてエクスカージョンの実施に向けて取り組んでもらうことになったが、先述の通り、参加人数が多いとうまく実施できないため、30名前後の受講生を午前と午後の2組に分けて、いずれかに参加してもらうことにした。さらに組内を3つずつの班に分割し、説明箇所の選定、地図や配布資料の準備、当日の説明、写真を用いた後日の報告などを分担して実施してもらうことにした。

エクスカージョンを土曜日実施としたため、授業が行われる月曜日まで日が短く、報告の準備期間が短くなるため、その間にデジタル地図の活用について、必要部分の印刷やWordやPowerPointへの挿入方法を中心に話をする時間を設けた。その次の回で、各班に写真を用いたスライドをPowerPointで作成してもらい、報告を行ってもらった。

最後に、当日のエクスカージョンで観察して気が付いた点を中心に写真を使ったまとめのレポートを作成してもらうとともに、相互に批評させるグループワークも試みた。

以上の実施にあたって、数種類のワークシートを活用した（表5）。事前学習にあたる下見レポートの振り返り、現地説明の準備、事後学習にあたるまとめレポートの振り返り、の3種類である。

表5 「地域基礎学」のエクスカージョン関係授業時ワークシートの質問・課題項目 (2019年度)

| ワークシート | 回 | 項目 |
|---------------------------|----|--|
| 「社会科授業研究」レポートに対するコメントを聞いて | 5 | 1. コメントが参考になった点 2. コメントに反論したい点、あるいは自身のレポートがよくできていたと考える点 3. 自分のレポートの改善について (改善すべきポイントなど) |
| 膳所城下町について・コース詳細決め | 6 | 1. 膳所城下町について (講義メモ) 2. 役割分担 (グループ… ___班; 役割に○をつける…3人班は「a」が「d」を兼ねる) a : 「コース案」(地図)作成+班活動司会・書記担当 b : 「しおり」(説明資料)の班担当部分の編集 (割付・デザイン) c : エクスカージョン報告会担当 (PowerPoint 作成を含む) + 記録用写真撮影担当 d : 当日現地説明担当+同組他班との連絡担当 ※ 説明資料の準備・作成、当日の写真撮影は全員行う 3. 説明ポイントと説明すべき内容の整理 説明場所/説明すべき内容のポイント (小学生にも分かるもの) |
| 「社会科授業研究」レポートを読む | 14 | 1. 他の人のレポートを読み、メモを取って下さい。 2. メモを参考に、読んだレポートに対して行うコメントをまとめて下さい。 3. 自分のレポートに対するコメントの要点をメモしましょう (それに対する自分の考えも)。 |

iii) スーパーの生鮮食品の産地調査

スーパーの見学は、第3学年の「販売の仕事」に関わるものとしての側面があるため、フィールドワークとして実践するのにふさわしい方法である。これに加えて、スーパーで見られる外国から輸入した生鮮食品を調査することにより、第5学年の「我が国の農業や水産業における食料生産」で扱われる「輸入など外国との関わり」の部分にアプローチできるため、組み合わせで実施した。

受講生に普段利用する近くのスーパーに足を運んでもらい、外国産の生鮮食品を10品目程度調べてもらい、授業内で全員に配布して共有し、これをもとに授業での活用をグループで議論してもらった。

(3) 「比較地域論」での取り組み

主に地理学研究室に所属するゼミ生が受講するフィールドワーク関係科目として、これまでは「比較地域論」(2回生秋学期)と「地域調査実習Ⅱ」(3回生春学期)があったが、「地域基礎学」をフィールドワーク関係科目とし、「社会科授業研究」と連動させたことにより、「社会科授業研究」のエクスカージョンで案内する必要がなくなった。これに伴い、「地域調査実習Ⅱ」は休講することとした。

一方、「比較地域論」で行っていたエクスカージョンの企画・準備・実施の部分も「地域基礎学」に持たせたため、「比較地域論」では別の内容を実施できる余地が生じた。そこで、それまで教員側が行っていたエクスカージョン対象地域の選定に取り組んでもらうことにした。尚、この移行に伴い、2019年度の3回生は「比較地域論」を2回(2018

年度にⅠ、2019年度にⅡを)受講することになった。

さらに、「社会科授業研究」の受講生によって書かれたレポートを評価する、という内容を付け加えることにした。また、「地域基礎学」で行われるエクスカージョンにも参加してもらうこととし、結果として「比較地域論」を通年(集中)科目とした。これにより、最終的なレポートの完成まで時間をかけて実施することが可能となった。

「比較地域論」の内容を大別すると、①エクスカージョンの下見と目的地の選定、②「社会科授業研究」レポートの評価、③授業で扱った内容に関する報告レポートの作成、の3つである。以下に詳細を述べる。

i) エクスカージョンの下見と目的地の選定

先述のように、これまでは教員側でエクスカージョンの目的地を選定し、それを学生に示して実施していたが、今回、いくつかの候補地を示し、それらを受講生自身が考えたコースで下見してもらったうえで、次年度の「社会科授業研究」「地域基礎学」で足を運ぶことになる目的地を話し合っ選定する、という形に見直した。

今回、候補地として京都・瀬田・草津の3地域を示した。「社会科授業研究」受講生に自ら足を運んでもらうため、あまり大学から遠くない地域を候補地とした。そのうえで、4月の授業初期に「比較地域論」受講生に対してこれらの地域の地形図を配布し、コースを考えてもらった。

さらに、下見に関しては、地域を変えてもう一度行ってもらうこととした。1度目の下見について報告してもらった後、その内容を受けて2度目の下見を別の受講生が行う、

という形式である。複数の地域を歩くことで比較しながら地域を理解することができ、授業名にも即している。

最後に、「草津」を2020年度の目的地として選定した。

ii) 「社会科授業研究」レポートの評価

「社会科授業研究」の下見報告レポートが2回生受講者から7月に提出されたのを受けて、これを「比較地域論」受講生に評価してもらうことにした。膳所城下町は前年に歩いており、それも活かしながら全員分のレポートを読み、それぞれの観点からトップ10を選んで評価してもらった。

さらに、その評価を「地域基礎学」の授業中に報告してもらうこととした。2019年度の報告では、レポートの書き方・まとめ方と写真の撮り方に関する指摘が中心であった。

iii) 授業で扱った内容に関する報告レポートの作成

最後に、次年度エクスカージョンの目的地選定のための下見と、2回生レポートの評価に関して、レポートをまとめてもらった。これらは、滋賀県地理教育研究会の研究発表会として開催される卒業論文発表会の際に、報告を行うことを前提でレポートをまとめてもらい、実際に当日報告を行ってもらった¹⁷⁾。

特記すべきこととして、レポートを当初は1人ずつまとめてもらったが、これを「レポート評価に関する内容」「写真の撮り方に関する内容」「下見に関する内容」の3種類のレポートに受講生間で統合してもらい、共同執筆の形に持っていった。当初から予定していたことではなく、演習中の会話からヒントを得て提案したことであったが、相互にレポートを読んだことが活かされた形となった。

5. まとめに代えて一生じた課題点と今後へ向けた対応

(1) 生じた課題点

以上のように、2018年度以前までの状況と2019年度の取り組みについて、小学校学習指導要領に準拠しつつ具体的に整理してきた。その成果については、概ねうまくいったものと考えてはいるものの、1年目ということもあり、評価することは難しいと考える。学習指導要領の方向性とは合致しているため、このような方法で継続していくべきと考えるが、評価についての分析は少し時期を置きたい。

一方、課題点については取り組んでいる中でいくつか見えてきた。これらの点について順に整理したい。

まず、「社会科授業研究」における取り組みについては、継続が難しくなるような大きな見直しが必要な課題は生じなかったと考えられる。日程の確保を各人に任せることができたうえに、地形図を読みながら歩くことも、コース地図の提出内容を見れば概ね問題なく実施できたと思われる。

ただし、レポートの書き方の部分では課題が残った。「比較地域論」受講生の評価でも指摘されたが、写真を用いたレポートの書き方としてうまくいっていない部分が多いという表面的な問題が大きかったように思われる。

一方、「地域基礎学」について課題となったのは、まず「大学周辺の土地利用調査」である。小学校の内容としては難しく、小・中連携を考えたとしても、身近な地域を「大まかに理解する」のにとどまる小学校の内容と、詳細な土地利用調査とを結びつけるのは簡単ではない。また2班に同じ地域を調査してもらったり、小グループ間の調査の精度に差が生じたりしていた点も気になる点である。

「比較地域論」については、従来から引き続けている内容が基礎になっているために、大きな問題点は生じなかったと思われる。ただ、「社会科授業研究」の下見レポートを評価する点については、分量の多い全員分のレポートを読んで評価した労力に比べて、評価の観点としてはレポートの書き方などが中心で、内容に踏み込むものは少なかった。さらに、次年度も同じことを行った場合、「地域基礎学」で評価を受けた学生が評価を行う立場になることもあり、評価の観点が似通ってくる可能性があることも、あまりプラスには働かないと考えられる。

(2) 2020年度以降へ向けての改良点

まず「社会科授業研究」については、基本的に同じ方法で進めていき、もう少し様子を見ることにするが、レポートの書き方についての一層の指導が必要であるとする。

「地域基礎学」では、「大学周辺の土地利用調査」の5回分を他の内容に置き換えることにした。小・中学校、そして2022年度の高校「地理総合」も含め、連続して取り上げられる「防災」を扱う方向性で検討している。

次に、「社会科授業研究」のレポートを「比較地域論」受講生が評価する点であるが、労力と成果を考えて取り止めることにした。そして「地域基礎学」で取りやめた「大学周辺の土地利用調査」について、少人数の方が行いやすいという点もあり、「比較地域論」で行うこととした。

現時点での改良点は以上であるが、引き続き細かい点の

修正も含めて、より良い形に整備していくことを目指し、改良を重ねていきたいと考えている。

もう1点、年度が変わって新たに生じた課題として、新型コロナウイルス感染症流行の影響により、5～6月の「下見」が予定通りに実施できない見込みであることが浮上した。フィールドワーク型の演習・講義にとっての影響は大きい、フィールドワークを行う科目が秋学期中心であるため、秋学期の授業がどのように実施されるかによって、状況も変化してくる。本報告が公開される頃には方向性が見えているだろうか。

注

- 1) 松田隆典「教員養成における地理教育の再生—滋賀大学教育学部の事例—」滋賀大学附属教育実践総合センター紀要（バイディア）24、2016、81～88頁。
- 2) 外池智「社会科教員養成における地域の教育資源を活用した授業構成演習—秋田大学教育文化学部社会科教育研究室の取り組みを事例として—」社会科教育研究 110、2010、58～68頁。
- 3) 磯野巧・宮岡邦任「地方国立大学の社会科教員養成課程における 地理学的フィールドワーク教育の再構築に向けた一考察」E-journal GEO 12-2、2017、233～245頁。
- 4) 河本大地「大学初年次における「身近な地域」の調査とウィキペディア編集—奈良のならまちでの実践からみた有効性と課題—」E-journal GEO 13-2、2018、534～548頁。
- 5) 文部科学省「【社会編】小学校学習指導要領（平成29年告示）解説」（文部科学省 web サイト、https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_003.pdf、2020年5月29日確認）、26頁。
- 6) 澤井陽介「小学校新学習指導要領社会科と環境教育」環境教育 27-2、2017、7～10頁（引用部は8頁）。
- 7) 前掲5) 142頁。
- 8) 前掲5) 144頁。
- 9) 前掲1) 84頁。
- 10) 前掲1) 84頁と88頁の注11)。
- 11) 一方、免許法上、小学校免許の科目とはなっていない。
- 12) 2014年度から2017年度まで筆者が、2018年度は松田教授がそれぞれ単独で授業を担当した。
- 13) 前掲1) 86頁に「宿題は身近な地域の地図を作成するだけでなく、地域のエクスカージョンをして、地域の特色をあらゆる場所の写真撮影を義務付けている」とある。
- 14) 遠方のため帰省が難しい場合は、大学近郊・下宿先等でのエクスカージョンを認めているが、ワークシートに記入してもらった出身市町村と出来上がったガイドマップとを照らし合わせると、実際には多くの学生が出身市町村でのエクスカージョンを行っている。
- 15) 2018年4月26日（木）午後と7月8日（日）に予定し、4月は開催できたが、7月分が延期となった。7月8日朝に大雨警報が出ており、実際には雨はほとんど降っていなかったが（気象庁のデータも確認）延期を決めた。その背景として、前日に京都府内で大雨特別警報が出ていたことがある（気象庁 web サイト、http://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/saigaiji/saigaiji_2018/saigaiji_201902.pdf、2020年3月15日確認）。
- 16) 例えば、筆者が単独で担当した最後の年度である2017年度には「社会科授業研究」の受講生27名のうち19名が、共同担当となった2019年度には「社会科授業研究」の受講生29名のうち23名が、それぞれ「地域基礎学」を受講している。
- 17) 当日の発表自体は、ゼミごとに卒業論文発表会が開催されている関係から地理研究室所属のゼミ生が行うことになったが、報告者としては受講者全員が名を連ねた。